

## ソ連旅行点描

三 和 康太郎

(1990年5月2日 受理)

### A Sketch of Travel in U. S. S. R.

Kōtarō MIWA

(Received May 2, 1990)

1989年6月から7月にかけて、ヘルシンキを経てエストニア共和国首都タリンに赴いた。国際会議のため6日間滞在したあと、レニングラード、モスクワを駆足で回った。その折の大ざっぱな、局地的かつ近視眼的な印象を、雑然と記してみよう。日本や西欧とちがうので、不満や途惑いを感じたことも多かった。尤もそれは、われわれの方がぜいたくに慣れているためかも知れない。

#### 1. 角砂糖は溶けないこと

まるで石のようで、紅茶に放り込んでも溶けないのである。長時間かければよいのではあるが、お茶は冷えてしまう。砂糖をかじりながら茶を飲むのだ、とも聞いた。

#### 2. 赤の広場は狭いこと

モスクワの赤の広場へ行って見たが、狭いので、案外だった。天安門広場や皇居前にくらべて、そう云える。

#### 3. 屑かごが少ないこと

公園や街かどに、屑入れがほとんどない。ソ連人はゴミを出さないのか、と気になった。タリンのホテルの部屋のゴミ入れも、容量が小さく、不便であった。

#### 4. 買物の方法が煩雑であること

スーパー店は別として、お金を払う所と品物を受取る所とが、はなれている。そこへ行くと、日本の店はスピーディなものだ。

#### 5. 料理の種類は少ないこと

レストランで注文しても、大ていの種類は品切れなのである。時間帯や人数の点もあったかも知れぬ。いきおいステーキなどの平凡なものに落着いた。ハヤシライスが出た折もある。ロシア民族料理をついに食べずじまいであった。味自体は悪くはなかった。

#### 6. 地下鉄のエスカレーターが高速のこと

老人や病人には、とうてい無理、と思われるスピードである。一行中の女性が乗るのを恐がったけれど、皆であと押しをして、事なきを得た(モスクワ)。

#### 7. 酒類を買えないこと

ゴルバチョフ政権の禁酒令のために、一般に売っていない。タリン市内で、一人の酔っぱらいがジープに乗せられ、連行されていったのを目撃した。ホテル内のバーでは、缶ビールを売っており、ドルを払って買い込み、それを飲んだ。

#### 8. 汽車は定時に発車すること

大国のソ連のことだから、列車の発着時間は大ざっぱなのか、と想像していたら、タリンのバルチック駅で、レニングラード行き寝台列車に乗り込んだところ、きちんと定時に動き出した。

#### 9. ドルを欲しがること

街を歩いていると、若い男が寄って来て、“ドルに替えてくれ”と云うのに、ずいぶんぶつかった。

#### 10. ホテルのエレベーターは時間がかかること

数が少なく、容積も小さくて、非能率である。上の部屋に用ができて上り下りして来るだけで、ゆうに30分くらいかかった(タリン)。

#### 11. デパートの品物は粗末であること

タリンの中心街の大きいデパートに入ってみたが、購買欲をそそるような品物は、全然ないのである。売っている布地もやぼったく、それを、主婦たちが行列して求めていた。

#### 12. 税関通過に時間がかかること

税関の係員の前に立つと、こちらの頭上に斜めの鏡が張ってある。ハゲの度合を映しても仕方があるまい、と思うのだが。若い係官がいつまでも睨んでいて、しごくじれたい。さいわいスーツケースを開けさせられることはなかった。

#### 13. 国際会議の運営は手際がよくないこと

場所を示すような看板とか表示が全くない。現地の建物のドアまで行くと、やっとポスターが貼ってある。探して来ればよからう、との考え方なら、それまでの話で

あるが。とにかく場所を知らぬ外人に対して、親切とは云えない。

#### 14. 時間は貴重と考えられていないこと

昼食のためバスに乗せられたのはよいが、なかなか発車しない。到着した先のレストランでも、一向に皿が来ない。午後のセッションに遅れてしまうので、食後のコーヒーを飲まずに、戻って来てしまった。日本ならお客が怒り出すところだ（国際会議のとき）。

#### 15. 権力者を批判できること

案内者のソ連大学生が、“ゴルバチョフは経済に失敗し、人びとから無能と思われている”と、われわれ外人に平気で語った。

#### 16. ホテルのベッドは小さいこと

日本のビジネスホテルのベッドより小さいくらいで、窮屈であった。ソ連人は身体が大きいはずなのに、なぜだろう、と不思議に感じた（タリンのホテル）。

#### 17. 中年の女性は太っていること

ポリバケツを胸部にのせても落ちないだろう、と思われる、横幅の大きい中年女性を、いたる所で見た。

#### 18. 回数券は回収されないこと

トロリーバスに乗ると、予め買った回数券を、車内の装置により自分でパンチする。それを回収箱に入れるのではない。持って帰れる。日本なら、ずるい人間が必ず何回も使うだろう。人民は信用されている（タリン）。

#### 19. ドルショップの内容は貧弱であること

自由主義国なら少しでも多く外人客に買わせようとするだろう。どの土産店でも一角を閉鎖してあったり、品切れだったりし、品物の種類もかなり少なかった。とにかく、売ろうという熱意が見受けられないのである。

#### 20. ガラスは不均質であること

大学の建物の窓ガラスの製造法はよくない。ガラスを透かした向う側の景色が、水中のようにイビツに見えた（タリン）。

#### 21. トイレがないことと判りにくいこと

赤の広場にはトイレがなかった。市内の有料トイレもたまたま目についたが、“この時間帯は閉鎖中”などと書いてあり、利用困難であった。タリンのデパートでトイ

レを探したけれど、見付からなかった。ソ連でビールやお茶をたらふく詰め込むのは、大いに禁物である。

#### 22. 道路は清潔であること

ゴミがほとんど落ちていない。タリンでは夜間に大がかりの清掃作業をしていたようだ。

#### 23. 横断歩道は危険であること

青信号になったとたんに、猛然と車が走り出す。日本式に横断していたら、確実に轢かれてしまうだろう。

#### 24. 水は貴重品であること

水のかわりに、食卓に出されるのが、味のまぜい炭酸水である。一日の見物から帰って来て、モスクワのホテルの食堂で出してもらった一杯の冷水が、この上なくうまかった。

#### 25. 勝手な行動は禁止であること

ソ連人の案内者が、何度も、“バラバラにならぬように”と繰り返した。小学生の遠足のようである。尤も一行の中にはとかく自由行動に走りたがる者もいた（エルミタージュ美術館の見学）。

#### 26. 民衆は親切であること

当方はお登りさんであるからいろいろと迷惑していると、親切に英語で教えてくれたことも少なくなかった。

#### 27. 勤労者の住宅が多いこと

少し郊外に出ると、団地の大集団が果しなくつづくのが、見られた。

#### 28. 行列が多いこと

街なかの行列がずいぶん目についた。行列も進んで自分の番になったとき、はじめて物件の種類が判明する、と云った例も多いらしい。

#### 29. 古いスタイルの建物が多いこと

どっしりした古い建築物が多く、いわゆる近代建築はきわめて少ない。タリンの旧市内には、由緒ある中世風の煉瓦作りの建物がかんりあった。

#### 30. 民衆の表情は明るく見えたこと

物資は不足がちで、東京などにくらべると、きわめて質素ながら、くたくなく生活しているようだ。尤も暗く生きても仕方がないであろうが——（タリンの街にて）。